

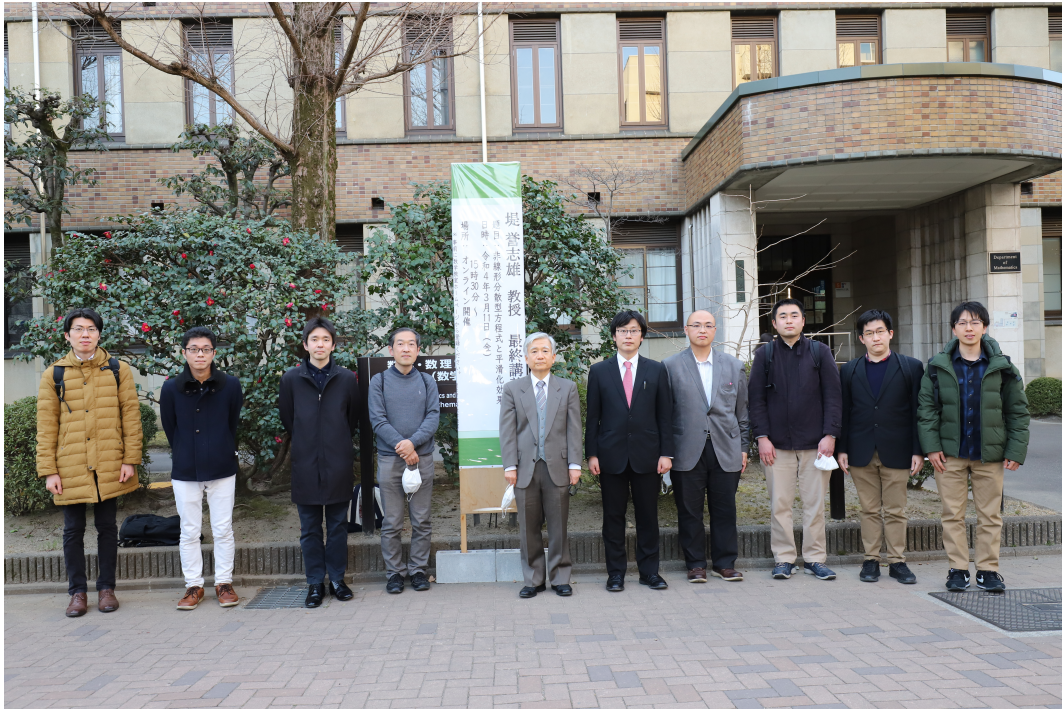
退任のご挨拶

理学部 3 号館と桜 ― 定年に寄せて

堤 誉志雄

私は 2022 年 3 月 31 日をもって、京都大学理学研究科を定年退職しました。2004 年 4 月に東北大学から赴任し、18 年間にわたり数学教室にお世話になったこととなります。前任地であった東北大学青葉山キャンパスは自然に恵まれた美しいキャンパスでしたが、数学教室のある理学部 3 号館の周辺は京都大学の歴史を感じさせる重厚な雰囲気を残すとともに、四季それぞれに美しい花が咲く都会のオアシスのような所でもあったと思います。仙台から京都に来て理学部 3 号館を最初に訪れた日は、鴨川沿いの桜並木と理学部 3 号館南側にあった桜の木々の美しかったことを覚えています。

私が京都大学に赴任した 2004 年は国立大学にとって戦後最大の変化があった年でもあります。この年の 4 月に国立大学は独立行政法人化され、教員と職員は国家公務員ではなくなりました。国立大学の教職員を国家公務員から外すことにより、外見上国家公務員の定員削減を行い、実際の定員削減を回避するという文科省の裏技でした。しかし、このもくろみはすぐに崩れ、このとき以降教員と職員の人員削減および運営交付金の削減が始まります。予算削減に相当する運営交付金削減をなんとか埋め合わせるため、文科省は 21 世紀 COE, グローバル COE などのプロジェクトを次から次へと設定し、各大学は大学運営資金を獲得するためにそれらのプロジェクトに繰り返し申請することになりました。まさに自転車操業となり、教員も職員もプロジェクト申請書類の作成、中間評価の書類作成、終了時の成果報告書の作成に労力と時間を割かなければならない事態に至っています。プロジェクト設定自体は悪いことではないと思いますが、設定の仕方には問題がありました。特にスクラップアンドビルド方式という名の下で、地方中小大学を事実上切り捨て、旧帝大系大学を中心に大規模有力大学に資源を集中する方法は一見良いようにも見えますが、海外の学術雑誌（例えば、Science）も特集記事を組み日本の基礎科学研究が危ないと警告を発しました。ところがなぜか、それらの批判は文部科学省内でまともに検討されることはなかったようです。定年までの 18 年間京都大学で教授という職に就きながら、この状態を少しも改善することができなかったことについては忸怩たる思いがあり、特に大学院生を含む若い研究者には申し訳ない気持ちでいっぱいです。



数学教室前にて（左から5人目：堤教授、6人目：前川専攻長）

日本の基礎科学研究が困難な時代に向かっている中で、個人的には京都大学の良さを感じることが度々ありました。その一つは、大学全体における数学という学問への敬意です。もとより京都大学は自由な学風を基本とし、すぐには役に立たない抽象理論の研究も大切にしてきました。多分その流れの中で、数学を重要視する雰囲気が残っているのでしょう。私が思うに日本において、数学に対し最も敬意を払っている大学は京都大学です。（二番目に敬意を払っている大学は東京大学だと思います。）そのような研究環境の中で好きな研究ができたことは研究者冥利に尽きます。

2018年9月に京都を襲った台風21号により、私のオフィスの窓から見えた桜の老木が倒れました。その老木は毎年春になると美しい花を咲かせていたので、私の定年のときもきつとこの桜を眺めながら去るのだらうなと思っていました。この桜木は私より先に行ってしまいましたが、定年を迎えた年の3月下旬、4月上旬も理学部3号館周辺で新しく植えられた桜が美しく咲いていました。昨今度々日本の学年暦を秋開始に改めようという議論が興っています。世界標準に合わせるという点で悪いことではないですが、新しく来るときに桜が咲き長くお世話になって去るときにも桜が咲いているという、日本人の心象風景は大きく変わるのではないのでしょうか。京都大学と京都大学数学教室・数理解析研究所のさらなるご発展を願ってやみません。